

クリスマスの夜に、君と

おののっきー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

輝子ちゃんの日常的な物語を書いていきたい。タイトルはどっかで変わるかも

クリスマスの夜に、君と

目次

1

クリスマスの夜に、君と

世はクリスマス。世界は白で満たされ人々は恋人との世を満喫していた。その中で一人、世界への不満を貯めに貯めて歩いている少女がいた。

(どいつもこいつもイチャイチャイチャイヤがって……聖夜がそんなに特別か、ああん!?!いっそ、ブラツデイクリスマスに……ダメか)

心に鬱憤を貯めながら、しかしそれを外にこぼさない少女は、早足になりながら自宅へと帰っていった。

「ただいまー……」

誰も居ないと分かっているながらドアの鍵を開け、たくさんのトモダチ(キノコ)が待つてる部屋へと帰る。

「……………あれ?」

玄関に入り、靴を脱ごうとして気づく。靴が一足ある。しかも私のではない、見慣れた靴が。

「おかえり〜輝子ちゃん。」

誰もいないと思っていたリビングから声が返ってくる。それも聞きなれた声。てとてとと足音をたてて姿を見せたのは、親友である小梅ちゃんだった。

「なんて美味しそうなんだ……小梅ちゃん凄いな……」

「えへへ……♪ほらほら、こたつ入って？」

小梅ちゃんに急かされて、こたつへと潜る。バーニングしていた心がほだされ、ぽわぽわしていく……。

「暖かい……」

「良かった……♪じゃあご飯にしようか……♪」

小梅ちゃんが鍋を通して私の反対側に座る。……

「？輝子ちゃん、立ち上がったって、どうしたの？」

私は暖かいこたつから抜け出し、テクテクと歩いていく。向かうのは、私から反対側の席。こたつとお鍋は暖かいが、

「フヒ……こつちの方が、暖かい……」

小梅ちゃんの隣の方が、暖かいな……

「……もう、輝子ちゃんつたら……はい、お鍋♪」

「ありがとう小梅ちゃん。私も……はい。」

互いに互いの腕を盛り、いただきますを言う。小梅ちゃんには、目玉ミートボール多目で。

「このあとは、借りてきたDVDみよ？」

「いいよ……キノコ出る？」

「キノコも出るよ……♪」

お鍋を食べ終わり、片付けまで終わって私たちは借りてきたホラーDVDを見ていた。輝子ちゃんの腕の中で。

「フヒ……カップルがまた死んだ……♪ホラーはいい……リア充爆発……フヒ」

私は輝子ちゃんを椅子にして、輝子ちゃんに抱きしめられる形でDVDを見ていた。DVDを見るときはいつもこのような形になる。

「あ……」

「？輝子ちゃん、どうしたの？」

「いや、今日はクリスマスなのに、小梅ちゃんになにもあげるものがないなって……小梅ちゃんからは、さっきの鍋だったり料理だったり、色々してもらったのに……」

……本当にしようがないなあ、輝子ちゃんは。

「じゃあ、私の顔を見て？」

「？こ、ここうか……？」

私の顔の上にある輝子ちゃんの顔が、私だけを見てくれている。

「?? 小梅ちゃん……？私の顔に、何か付いてる……？」

「んーん……♪」

きよとんとした顔も可愛いなあ……輝子ちゃんは気づいてないんだろうなあ……

「あのね、輝子ちゃん。」

「何……？」

輝子ちゃんが一緒にいてくれるだけで、私はとても幸せなんだよ。

「……何でもないよ♪」

「へ、変な小梅ちゃんだな……」

「エへへ……あ、DVD終わっちゃった……続き、見よう？」

「うん……次は、キノコが出るやつがいいな……」